

## 文献要約

# ガン・カモ科鳥類と天敵キツネとの関係

堀内盛一

キツネの剝製を見つけるや否やガンやカモ類が警戒姿勢をとりながら、この剝製に近づいて来た。

この事は、日本白鳥の会のイギリス旅行におけるスリムブリッチでの記憶に新しいところである。もちろんキツネがカモ類などの天敵である事は承知していた。しかし、あのように一斉に天敵に近づいて来ようとは私自身知らなかった。

帰国後、偶然にも「天敵に寄る鴨の奇襲」(堀内讃位 1942年)と題し、赤犬で鴨を寄せて銃猟する猟法について記述してある文献を手にしたので、その内容を略記させて頂く。

カモの猟に赤犬を使うといえば、キジやヤマドリのように犬に捜索させ、追い出したものをうつと考えがちであるが、赤犬猟はカモを追い出させるのではなく、むしろその反対で、カモを身近に誘き寄せてうつ仕組のものである。我々が一口に罠といっているものには、これを二つに分けて考えることが出来る。その一つは同じ種類のものを使う場合、つまりウミウを捕るのにウミウの罠を使い、キジを捕るのにキジの罠を使うなどの方法であり、もう一つは天敵を利用する場合で、シジュウカラやヒガラを捕るのにフクロウやコノハズクを使い、カモを捕るのに犬やキツネやタヌキを使うなどの方法である。

さて、赤犬猟は、文献の伝える所によると、この猟の発祥の因となったのは、野生のキツネであるとしている。昔ある鷹匠が、淀川河口ではからずも一頭のキツネに向って殺到するカモの大群を目撃して、その行動に不審を抱き、再三同じ光景を見るに及んで遂にキツネに代える赤犬をもって同じ結果を得た。

これが赤犬を罠として用い、カモを誘き寄せる起因となった。ところが長野県の野尻湖畔の赤犬猟の動機となったのは野生のキツネではなく、イタチであったと言われている。このように2か所でそれぞれ発祥した一方、イギリスにおいても鴨場の猟に犬を使っている。

次に、野尻湖畔における赤犬猟は、まず、赤犬の腹を空かせることから始まる。午後に猟をやるうとすると、朝飯と昼飯を食わせずにおく。猟師は赤犬をつれて船に乗り、カモの居る入江に進んで行く。カモはエンジンの音で飛び去る。船は、飛び去るカモには目もくれず進ませ、湖岸につける。カモの姿はもう見えないが、猟師は鳥舎を作り、そこに入る。一人の猟師が船に乗り込み、沖の方へ疾走して行く。しばらくして、カモの一群が湖面に飛び降り、異状なしと見ると入江の奥深く泳いで来る。遠くから一隻の船がエンジンを止

めて手こぎでカモの一群に近づく。鳥舎の前方  
100 mまでカモが寄った所で、犬使いが一片の  
ビスケットを鳥舎の右側へ投げる。犬がさっと跳  
り出しビスケットを食べ、鳥舎に駆け込む。今度  
は左側へ。空腹の犬はまたビスケットを追う。拾  
うとまた鳥舎の中に。今度は右、次は左と交互に

繰り返す。鳥舎からピョンと飛び出てピョンと引  
き込む犬の姿を発見したカモの一群は、赤犬目掛  
けて押し寄せる。この猛進するカモの状態を認め  
ると、鳥追いの船は漕ぐのも止めて傍観の態度を  
とる。赤犬を見て一途に寄せて来て、既に射程距  
離内に入ったと見るや、犬使いは今度は一握りの



(猟犬が近寄っても逃げようとしないオオハクチョウ写真 本田 清)

ビスケットをバラバラと投げる。犬は今まで一片  
宛だったので拾うのも一口であったが、今度は、  
立ちどまって食べる。カモの群は、犬の姿が鳥舎  
の外に止ったのを見て、ピタリとその場で進行を  
止め、犬が次にどうゆう行動に出るかを凝視する。

この時、全部の猟師が一斉に鳥舎から身を乗り出  
して射撃するのである。

以上のごとくであるが、この習性を鳥獣保護の  
ために活用されることを切望するものである。